井戸庄三先生を悼む

雲仙にて
（2003年）

長年にわたって本学会に貢献された井戸庄三先生は，2005年6月27日，不帰の客となられた。71歳の誕生日を迎えられた直後のことであった。病巣が発見されたときには余命半年という診断であったが，ご家族の懸命の看護と滋賀医科大学の総力を結集した治療のかいもあって，故郷近江の風景を味わいながら1年2ヶ月を過ごされたことを，わずかながらも慰めとせざるを得ない。

先生は，1934年6月19日滋賀県彦根市に生まれ，1953年県立彦根東高等学校を卒業。京都大学文学部史学科で人文地理学を専攻された。大学院修士課程を修了後，1960年に県立膳所高等学校教諭，1964年に金沢大学助手（教育学部），1968年に徳島大学助教授（教養部），1972年には教授に昇任された。意図されたわけではないであろうが，この間の赴任地は，いずれも郷里の彦根と同様に歴史的景観が色濃く残る城下町であった。1975年には滋賀医科大学教授（医学部）に就任，定年退官後は龍谷大学文学部の特任教授として講義された。帰郷後，なつかしい生家から30年間通勤されたことになる。

ご専攻は歴史地理であったが，なかでも明治期における行政地理学がその主軸をなしていた。地方自治制・区制・市制・町村制・市町村合併・町村分合・戸籍・通婚圏・歴史地名と新地名などに関する研究は，勤務地の石川県・徳島県・滋賀県をはじめとする約30府県におよぶ明治期の史資料を駆使しての実証的なものであった。これらは行政区域の編成過程や行政地名として採用された地名の根拠や経緯を検討するにとどまらず，その行政的措置の是非をも論じたものである。詳細な分析を経て，「統治の論理」「自治の論理」「行政の論理」の3類型を設定して，行政地域の実態に迫った研究は，きわめて迫力に満ちたものであった。平成の市町村合併の嵐が吹き荒れる昨今，もし先生がお元気であったなら示唆に富む見解を表明されたであろうと残念でならない。

先生の研究対象はこのように全国におよんだが，なかでも滋賀県については，『滋賀県市町村沿革史』や『新版　滋賀県の歴史』をはじめとして，草津市史・八日市市史・栗東町史などの刊行にも参画された。

近江商人の伝統をもつ風土のなかで育たれたゆえであろうか，あるいはまた研究テーマのゆえであろうか，先生は気配りに満ちた暖かい行政的手腕に優れた人であった。人文地理学会の編集理事・集会理事として円滑に学会運営を果たされ，また滋賀県の各種委員会の委員として積極的に発言，地域の発展にも多大な貢献をされた。

医科大学の地理学教員といういわば特殊なポストにあって，先生は，医学生に地理学的知識の涵養の必要性を説かれた。医師たるものは地域と地域住民を理解しなければならないという信念を標榜しておられた。それゆえ医科大学としては例外的な充実した教育体制を構築された。通常の地理学の教養科目以外に，特別講義として毎年数名の地理学研究者を招聘された。近隣の地理学教員のほとんどは滋賀医科大学の教壇に立った経験をもつ。

また20年以上にわたって，年に3回の臨地巡検も実施された。この巡検はいわば滋賀医科大学の名物講義ともいうべきもので，医学の教授が参加されることもあった。滋賀大学の新旧教員である筆者と秋山元秀・野間晴雄・松田隆典，龍谷大学の川端基夫が先生に同行して臨地講義をさせてもらった。見学のかたわら医療の心構えを説かれる先生の言葉は深い感銘を与えたようで，卒業後も先生を囲む懇親会がしばしば開催されていたと聞く。巡検終了後は駅前の居酒屋で講師をもてなしてくださった。まず例外なく深酒となったが，別れる前には奥様が用意された彦根の銘菓をお土産にともたせてくださった。楽しい時間であった。いま学生に話しかけているとき，ふと井戸先生の口調を真似ていることを感じる。

（高橋誠一）